

粘膜下腫瘍様発育を呈した早期胃癌に対してLECS施行後に腹腔鏡補助下幽門保存胃切除を施行した1例

防衛医科大学校 外科学講座

辻本広紀、矢口義久、熊野 勲、高畑りさ、松本佑介、吉田一路、堀口寛之、小野聡、山本順司、長谷和生

「緒言」胃粘膜下腫瘍の術前診断でLECSを施行し、病理診断でSMIに及ぶ早期胃癌と判明したため、腹腔鏡補助下幽門保存胃切除を施行した1例を経験したので報告する。

「症例」 歳男性。胃体中部後壁に2cmの粘膜下腫瘍の診断で、当院消化器内科受診。EUSでは第4層由来の粘膜下腫瘍として描出された。なお生検は施行されなかった。以上より、胃粘膜下腫瘍の診断で、平成23年6月に腹腔鏡内視鏡合同手術(LECS)を施行した。POD1より経口摂取開始し、術後経過良好でPOD7に退院となった。術後の病理検査では低分化型腺癌、深達度T1b(SM)、Ly0、v0の診断であった。切除断端は陰性であった。本人・家人に追加切除の必要性を説明し、同意が得られたため、LECSより33日後に腹腔鏡補助下幽門保存胃切除術、D1+郭清を行った。手術では、追加切除標本には腫瘍細胞の遺残は認められず、摘出したリンパ節にも転移は認められなかった。術後経過順調でPOD11に軽快退院となった。

「結語」本症例は粘膜下腫瘍様発育を示す早期胃癌であり、このような症例ではLECSの適応を慎重に判断すべきであった。LECSを行う際には、周囲組織への粘膜面の接触や胃内容物の漏出には細心の注意が必要であるが、腫瘍からの生検や内視鏡的吸引細胞診など術前の質的診断も重要であると考えられた。「目的」細菌DNAの自然免疫への関与を検討。「方法」1. 外科感染症患者(Pt),腹膜炎マウス(CLP)の血中細菌DNAをPCR法により検出。2. マウス樹状細胞(DC)をCpG DNAで刺激し、DCの活性化、T細胞刺激能をControl DNAと比較。3. CpG DNAのmacrophageサイトカイン産生能を検討。4. CLP 12時間後にCpG DNAを投与し血清サイトカイン、予後をControl DNAと比較。「結果」1. Ptの75%、CLPの75%より細菌DNAが検出。2. CpG DNAは成熟DCを誘導、IL12, TNF α , IL10産生の亢進。CpG DNAはDC遊走能亢進、貪食能抑制、T cell増殖を誘導。3. CpG DNAはマクロファージからのTNF α , MIP2, IL12, IL10産生を誘導。4. CLP後のCpG DNAの投与により、MIP2, IL12, IFN γ , IL10の有意な上昇と生存曲線の低下。「結語」外科感染症患者や腹膜炎マウス血中より細菌DNAが検出。さらにCpG DNAは自然免疫細胞を著明に活性化させることが証明され、細菌DNAの外科感染症の病態形成への関与が推測された